



## 蔡倫からPDFへ

—書籍スタイルの変革期に立ち会う—

田中靖彦 国際社会学科

マイケル・ハート(1932-)は、自著『歴史を創った100人』(開発社、1980年。原著初版Michael H. Hart, *The 100: A Ranking of the Most Influential Persons in History*, New York: Hart Publishing Company, 1978)において、世界の歴史に影響を及ぼした人物を一位から百位までランク付けした。気になるその順位トップ10は、一位ムハンマド、二位ニュートン、三位イエス、四位ブッダ(釈迦)、五位孔子、六位パウロ、七位蔡倫、八位ゲーテンベルグ、九位コロンブス、十位アインシュタイン...となっている。世界史の有名人たちが名を連ねている中、第七位だけは知らないという方も多いのではなかろうか。

蔡倫(生没年不明。50-121?)。中国、後漢時代を生き、政争の中、自害に追い込まれた人物である。非業の最期を遂げた彼であったが、彼の名は「紙の発明者」として、燦然と歴史に残ることとなった(最近では、紙の発明者というより改良者と捉えるべきという説が有力である)。

その昔、中国では、文字を竹や木の板に書いていた。これを竹簡・木牘などと呼ぶ。だが竹や木は、重いし、かさばる。そのため、書ける文字数も限定されてしまうし、おまけに保存には場所を取る。そんなものを所有できるのは、権力者や大金持ちだけであった。

そこに現れたのが、紙である。蔡倫は、樹皮やぼろ布、麻などを用いて紙を作り、皇帝に献上した。西暦105年のことである。その後、製紙法は改良が重ねられ、良質で安価な紙が大量に製造されるようになっていく。そして文字は徐々に、木や竹ではなく紙に書かれるようになっていった。紙は、竹などに比べて扱いや大量の保存が容易であり、このことが中国における文字資料の飛躍的な増大をもたらすことになる。換言すれば、世界の他の地域に比べ、中国に古くから記録が歴大に残っている理由の一つは、紙が発明されたことに求められるのである。

製紙法は、日本や朝鮮半島など東アジア地域には早くから伝わったほか、西方へはやや遅れて751年、世界史でも有名なタラス河畔の戦いを契機に伝播する。こうして紙は、文字や絵を書く媒体として、世界中に広まっていくことになる。

紙の登場は、文字に基づく文明のありかたを大きく変えた。というより、文芸・学問は言うに及ばず、現在の日本文化の大きな一側面を形成する漫画文化まで、紙なくては成り立たなかったと言って過言ではない。ハートが蔡倫を高く評価したのも当然と言えよう。

昨今急速に進む文献の電子化は、文字資料の歴史において、紙の発明以来の大変革となる可能性は低くない。ただし、電子書籍は、保存や複写が容易という利点がある一方、著作権などの面で大きな問題も抱えている。また、紙の書籍がただちにすべて電子書籍に取って代わられることもあるまい。だが、書籍の電子化という大きな流れは、もはや不可避であろう。本というもののあり方が、大きく変わろうとしているのであり、我々は、その歴史的な一大変革の現場の立会人なのである。そして本は、様々な形式を変えながらも、我々の良き隣人として、きょうも知識と楽しみをもたらしてくれている。

## 多くの基準を持つこと

山本花江 人文学研究科文化共生専攻2年

本はそれを読む人がいて初めてその価値を最大限に発揮するものである。そうであるために、本を読む人が本とどう関わるかによって本の未来は変わってくる。たとえば、最初がつまらなければ買うのをやめる人もいれば、とにかく買って読んでみる人もいるだろう。また、楽しむために本を探している人にとっては辞書や図鑑などは価値がない本となるだろうが、調べものをしている人にとっては大切な本となることもあろう。このようなことが起こるのも、本を読む人がどのような目的や基準を持っているかによってその本の価値や未来が大きく変わってくるためである。

このような本を選ぶ基準にはタイトルや著者、出版社、シリーズ、または娯楽、教養、学習などいろいろなものがある。さらにこれらに加えて、「何気なく手に取る」というものもあると思う。これは、たくさんある中からふとその本を手に取る。なぜその本を手にとったのか説明することはできないのだが、なぜか気になるというものである。本を選ぶときにはこのような言葉では説明できないような感覚も大切にしたい。

このように本を読む側が本を選ぶ基準をたくさん持っていること。これもまた本の未来を明るくする1つの方法ではないかと思う。そしてそれは同時に本を読む私たち自身の未来を明るくすることにもなり、このような点でプレがなければ、本が紙製か電子書籍かといったようなことも大した問題ではないと言えるのではないだろうか。

## 本の未来

上原綾菜 人文学研究科文化共生専攻2年

電子書籍に賛成か反対かという議論が度々取り上げられる。私は賛成である。電子書籍の利点は、動画や音声といった文字以外の活用、そして複数の書物を持ち運ばずに済むことである。現在よく使われている電子辞書も電子書籍である。電子辞書と従来の辞書どちらが使いやすいか、学生の勉強風景を見れば一目瞭然である。授業中に開くのは電子辞書であり、紙の辞書を使う人はまず見ない。

では辞書以外はどうか。音声や動画付きのものもあり、なおかつ複数の書物が一つ分の場所で済む。さらにデータベース化されたものは、全文検索によって語句を打ち込むだけでどこに書かれているか探し出すことが可能となった。

(次ページへ続く)



(前ページより続く)

このように利点の多い電子書籍だがなぜ批判が出てくるのか。それは従来の紙媒体の本を読まなくなるのではという懸念を抱くからである。ただでさえ本を読まない若者が増えている中、さらに本に手を出す機会を減らすことに繋がるとも考えられる。だが、そもそも本離れした人達が電子書籍になったからといって読むようになるのか。むしろ本を読むきっかけとなるのではないだろうか。また著作権の問題や電子媒体としての弱点など問題とされる点は多々ある。だが、紙媒体でも重量のあるものや管理の手間など問題となる点はある。

読書の多様化の問題は、何を読むかだけでなく何から読むかということも考えなければならぬということである。情報を受け取る側が自ら選ばなくてはならないということであり、それは多様化された中から必要な方法を選択する力、見極める力をつけなければならないということである。

## わたしと本

藤木圭子 国際社会学科2012年度卒業生

私は幼稚園児の頃から現在に至るまで、自分の知らない世界を知ることができる「読書」が大好きです。本には様々な種類の本が存在しますが、その中で特に好きな種類は伝記です。そしてこれは正確には「読紙」というべきかもしれませんが、新聞を読むことも欠かせません。伝記は、歴史上の人物がなぜそのような行動をとったのか、や、それに付随して当時の人々の考え、価値観も知ることができるため、より一層人類が刻んできた歴史を身近に感じることができるし、新聞では日々刻々と変化する世界情勢を知ることができるため、私は毎日この2種類の『読書』をするようにしています。私は読書をするにあたって、いつも物事の真相にせまることへの期待と希望を胸に抱きながら次のページをめくっているのです。一日のうちで一番読書をしている時が楽しいし、また知識が増えることにより、自分の意見が持てるようになるため自信にもなります。

近年では、若い世代の人を中心に書籍や新聞などの文字媒体に興味を持たない「活字離れ」が深刻な社会問題になっています。進行する主な理由として、仕事社会と呼ばれる現代において、読書のためだけに時間を取ることが難しいことが挙げられます。

しかしながら、私は多忙を極める人こそ自分を見失わないツールとして本を読むことを忘れてはいけないのだと思います。「本」とは、いわば先人の知識の結晶であり、壁に当たった時は、先人の力を借りて対処すれば良いし、何より人類のかけがえのない財産として後世に受け継がれていくべき物です。そのため、現代に生きる私たちはこの財産を後世にも伝え、人類と環境の平和について話し合っていく使命があるのではないかと思います。



## 敬愛なるJ.K.ローリング氏へ

山本 薫 英語コミュニケーション学科3年

本との出会いこそ、私の原点だ。本があったから、今の私がある。

言語興味を喚起してくれた、あのハリー・ポッターとの出会いを契機に、私は語学を大学の主専攻に、と決意した。純然たる“マグル”の私だが、言語の魔法に魅了され、いつかは自分もこんな言語を自在に操る魔女になれば、と考えたのだ。

そんな楽しさを教えてくれたローリング氏が、突如、私の敵となった。2011年6月12日のことだ。どんな媒体でも電子書籍化反対を強く、明確に公言していた彼女が、電子書籍発売を容認したことは、私にとって受け入れがたく、今でも不思議でならない。私は、紙書籍派で、本は将来、電子書籍が紙書籍に取って代わり、支配的になることに懐疑的である。

しかし、電子書籍優勢の流れを感じてはいる。欧米では何年も前から電子書籍に移行する試みがなされ、実用化されており、この電子産業が与える経済効果は目を見張るものがある。また場所をとらない、重くない等の利便性は、もはや誰も否定することができないだろう。Kindleは一定の成功を収め、英語版Newsweekはこの電子版の流れを受けてか、紙版は昨年末に終了した。ローリング氏も、自分の子どもとしていたハリーを魔法のホウキではなく、文明の利器に乗せるに踏み切った理由として、電子書籍のもつ利便性と簡易性を挙げている。私は、電子書籍の持つ利便性を否定するつもりも、この電子書籍化の流れが止まり、完全に紙書籍に戻ることを期待しているというわけでもない。また、単なる保守主義者として、紙書籍を擁護しているわけでもない。私は、電子書籍は行き着くところ、結局、紙書籍の補完としかならないと考えているのだ。

作家のニコラス・カー氏の「最後に笑うのは、ゲーテンベルクか？」という記事の分析によれば、本は電子書籍に向いているものと向いていないものがあり、人は本の重みによって、その情報を実感し、読んだことに満足感を得るのだという。なかでも、文学はストーリーの展開をクライマックスまでどれほどか、それとなくページの厚みを確かめることで、ますます楽しみになっていくのだそう。私の初めての読書体験を考えても、この説は大きな説得力がある。もし、私が初めて会ったハリーがあのズシリとした重みもないものなら、こんなにも記憶に残っただろうか。言語の重みも多少違ったのではないだろうか。なんでも電子化すれば良いという現在の流れに疑問を感じるばかりだ。

敬愛なるローリング氏が、自身の電子書籍化という決定について、思い直す日がくることを願うとともに、電子書籍が必要な分野で活かされ、紙書籍と共存していくことを強く望む。

